

# “地域”における高校生の 自主的自治的活動と支援組織

—高校生フェスティバル研究序説その①—

熊 沢 勇 紀  
(教養部非常勤講師)

## はじめに

近年、「学級崩壊」や子どもの「荒れ」、少年犯罪に関するマスコミの報道が多発している。さらには、少年法の「改正」や教育基本法の「改正」までが一部で話題となっている。

ところで、教育基本法では「教育の目的」として、「教育は、人格の完成を目指し、平和的な国家および社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に満ちた心身共に健康な国民の育成を期して行われなければならない」(第1条)もので、その達成のために「教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場所において実現されねばならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、實際生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献するよう努めなければならない」(第2条)と規定している。

すなわち、教育は「平和的な国家および社会」を形成する者としての民主的主権者へと子ども・青年を教育していくことを目的とし、そのためには、「学校」のみならず「あらゆる機会、あらゆる場所」において達成されるものであるということが出来る。

近年、「学校と地域の連携」が叫ばれている。しかしこの「連携」は、「学校」と「地域」の役割を限定し、機械的な役割分担のもとに「学校スリム化」を推し進めるものなのか<sup>(1)</sup>。それとも、双方の教育力の関連に注目し、それぞれの教育内容を豊かに発展させながら、その内容を相互に環流させていくのか。それぞれがどのような役割を持ち、どのように関わっているのか。その関係性に注目し、教育内容として連携していくものなのかを問わなければならない。

すなわち、子どもの成長・発達に関わる場所としては、「学校」と学校の外としての「地域」というように、それぞれの場所を分割し補い合うという関係ではなく、学校を含めたという意味での“地域”<sup>(2)</sup> ととらえ、その中での学校と学校外の世界としての「地域」の教育力の内実が相互に触発し環流しあうという、関係性に注目する必要がある<sup>(3)</sup>。

そのような、学校を含めた“地域”における、高校生の自主的自治的活動として、「愛知県高校生フェスティバル」の取り組みがある。

この「フェスティバル」を企画し運営する、愛知県高校生フェスティバル実行委員会は、1986年9月に「愛知県私立高校生フェスティバル実行委員会」として結成され、その後、公立高校生や私立中学生も加わり、自主的自治的な高校生を中心とする活動組織として発展した。1986年11月の第1回より、春と秋の年2回の「高校生フェスティバル」を開催。半年を1期として、現在は「第29期実行委員会」となっている。実行委員会は様々な中学・高校から自主的に集まってきた生徒たちによって構成される、いわゆる「出入り自由」の任意加入型組織である。2000年8月現在で50校540名の実行委員が在籍している。その活動を19校26名の本部顧問団、私立高校31校約50名の学内顧問団の教職員が支えている。同年5月4日に南山高校男子部で開催された「新入生歓迎フェスティバル」では1万名以上の参加者を集めた。

この「フェスティバル」の他に、「スプリングセミナー」(毎年3月実施)や「生徒会文化祭交流会」(毎年6月実施)などの学習交流会を主催。また、「阪神淡路大震災でお父さんお母さんを亡くした中学生高校生に奨学金を贈る会」(略称・贈る会)が主催する年2回の神戸体験ボランティア、

毎月の募金活動（17日募金）。「私学奨学資金財団1億円募金運動」（99年3月から）や愛知県庁内で各校生徒会とともに、34校40生徒会長の賛同を得て『私学助成金削減反対共同声明』記者会見（99年6月）を実施。また、鶴舞公園で開催された「なごややろまい祭り」には「2000人太鼓・群舞」として参加（2000年1月1日午前0時）。「日本ど真ん中祭り」に「高校生フェスチーム」として参加（2000年8月）など、多様な形で現実社会への意見表明、社会参加をもおこなっている。

この実践は、年2回の「フェスティバル」の企画・運営を基軸とする学校の枠を越えた——すなわち学校の外における「地域」での——高校生による自主的自治的活動でありながら、「フェスティバル」の企画・運営にとどまらず、教師や父母、多彩な市民と協同しながら、それぞれの学校の主体者として行動し、さらには現実社会への意見表明、社会参加をも展開しながら、高校生自身が民主的主権者として行動し、成長している過程を示すきわめて大規模かつ多様な実践である。

そこで、本研究では「愛知県高校生フェスティバル」の実践を対象にし、この実践の全体像を明らかにするとともに、その教育学的意義と課題を、生活指導とりわけ地域生活指導の観点から解明することを課題とする。

筆者は、98年4月よりこの高校生フェスの実行委員会と教師による顧問団の活動について調査を開始し、現在も継続中であるが、この課題に答えるには、高校生フェスの実践はきわめて大規模であり、複雑である。まず、本稿ではこの研究の第一歩として、高校生フェスの全体像を明らかにするために、資料的性格も付与しながら、この活動の概要とその組織形態を把握することを目的とする。

## 1. 先行研究に見る「愛知県高校生フェスティバル」

これまで、愛知県における私学運動の一環として、「愛知県高校生フェスティバル」（以下高校生フェス）は位置づけられ、研究の対象とされてきた。

井上毅の報告にあるように、高校生フェスが、「大人の組織と運動という

胎内からフェスティバルは生まれ、生まれたフェスティバルが、大人たちに守られて発展しながら大人たちの運動を質的に転換させるという構造」<sup>(4)</sup>を持っていたという特質がある。

これは、愛知私教連（愛知県私立学校教職員組合連合）に結集する教師と愛知父母懇（私学をよくする愛知父母懇談会）に集う父母との組織と運動が誕生の背景にありながらも、そこから生まれた高校生独自の活動が既にある大人たちの運動に大きな影響を与える。そして、大人の組織との協同性と自立性を併せ持ちながら、この活動が展開されてきたのである。

小島昌夫は、高校生フェスと大人たちの組織と運動（とりわけ父母懇）との関わりを、「愛知私学の高校生たちは父母懇という厚い雲（きんと雲）の上で孫悟空のように活躍することが保障され、その悟空の活躍がマスコミにのり、県民世論に支持されることで、父母たちの私学教育への信頼は増し、きんと雲はいつそう厚くなることが可能になったのではないか」<sup>(5)</sup>と評価して、高校生の学校の枠を越えた自主的自治的活動における、大人たちによる一定の保護とその重要性を説いている。たしかに、高校生フェスが14年以上活動を継続してこられた背景には、大人による一定の保護は重要な要素であった。

その一方で、この活動に注目していた教育科学学会は、愛知私教連との合同研究会を開催し、その中で、高校生の「自前の」自治の実質を持ち、生徒主導の学校改革の方向を持たねばならないのではないかと、教師主導になっていないかという疑問も出されていた<sup>(6)</sup>。

ただ、この高校生フェスの活動は父母や教師が一方的に保護し、「指導」してきたというものではない。

学校の枠を越えた高校生フェスの活動の持つ世界について、堀尾輝久は「各学校の生徒会や文化祭の活性化にそのまま環流してゆくことによって、次の高校生フェスティバルへのエネルギーを蓄え、その出し物を多彩にすることになってゆく」のみならず、そのエネルギーは「自分の学校の外で、他校生と共同で共感の世界を創りあげ、表現した生徒たちのエネルギーとその批判精神は、それぞれの学校の内部からの教育の変革に向かう。学校の外で生徒を見る目を変えた教師たちと、自分たちの教室の中での、新し

い出会い、お互いの新たな発見がつづき、人間の信頼にたつ人間教育が創られゆくのである」<sup>(7)</sup>として高校生自身の世界をつくりだし、その世界で受けた触発を「学校」に環流し、さらに「学校」での触発をまたフェスの世界へと環流するという、相互の〈触発と環流〉の動的な関係があることを指摘した。

この堀尾の指摘する「学校」とフェスの世界における触発と環流は、学校を含めた“地域”において、高校生自身がどのように民主的主権者として成長していくのか、またその過程において、学校とその外の世界としての「地域」がどのような関係を持っているのかを検証する上で示唆に富むものである。

すなわち、高校生フェスの活動においては、学校の外における「祭り」としての「フェスティバル」を作りあげるといった特定の目的追求に止まらず、フェスの生徒たちが学校の主体者として行動し、学校の自主的活動を活性化させるという、フェスと学校との間で〈触発と環流〉が機能しているということがいえる。しかもそれは、学校とフェスとの間にとどまらず、現実の社会との間でも起きはじめている。

さらに、最近では直接的に現実社会と関わった「『私学助成金削減反対共同声明』記者会見」や「一億円募金運動」の活動が、自主的な学習要求を引き出し、高校生による学習運動を生み出しており、この近年の活動は「決して単純な『社会的・政治的』活動に止まることなく、『自分を語る』触発装置として、“自己を客観化し、他者との関係の重要性を自覚し、とりわけ、人間への信頼を回復・確信させる”すぐれて今日的・人間的な『教育活動』」<sup>(8)</sup>との評価もある。つまり社会的な活動に踏み出したことが、高校生フェスの活動そのものを、より豊かに発展させることになったということがいえよう。

ところで、多くの「地域」での子ども・青年の自主的な組織は、学校の外での活動にとどまり、学校を相対化し、そのメンバーそれぞれの中に棲み分け、補いあうことで、相互の環流がおきていない状況がある。では、なぜ高校生フェスにはこの〈触発と環流〉の動的な関係が成立するのか。また、それはどのような状況に置いて機能するのか。

そしてそのためには、どのような生徒の活動を保障する必要があるのか。この活動の保障のために教師や父母はどのような指導性・協同性が必要なのか。そしてそれらを可能にする生徒・父母・教師の組織形態があるのか。これが問題となってくる。ここに、高校生フェスにおける日常的な組織と活動およびその支援組織の実態を解明する意味がある。

## 2. 成立と歩み

### (1) 誕生とその背景

愛知県高校生フェスティバルは、「愛知県私立高校生フェスティバル実行委員会」として1986年9月13日、決起総会が愛知淑徳高校において開催され、愛知県下19校の生徒と教員計88名で結成された。

そして、86年11月16日、第1回「私立高校生フェスティバル」は名古屋市大高緑地公園において「父母と教師の大集会」に合流して開催された。また、当時、実行委員長は教師（同朋高校・米村氏）が務め、高校生は副実行委員長を担うという変則的な形であった。このような変則的な形ではじまったことには、次のような背景がある<sup>(9)</sup>。

その背景には、1970年代後半以降、引き続き授業料値上げに対して、私学助成運動に取り組んできた父母と教師の運動があった。しかし、83年には臨時行政調査会が「私学助成抑制」の答申を出し、国の私学助成が10%削減される中で、父母たちの署名運動は広がり、85年には392万名の署名が集まった。

この運動の主な担い手であったのは、「愛知私教連」という愛知県下私学の教職員組合に結集する教師たちと、「愛知父母懇」（私学をよくする愛知父母懇談会）に集う父母たちであり、毎年秋に「父母と教師の大集会」を開催するのが恒例となっていた。

このような愛知の私学に集う父母と教師の運動には当初、生徒たちは参加していなかった。しかし生徒の中から、「なぜ、父母と教職員だけなんだ。自分たちもあのようにやりたい」という声が高まり、この生徒の要求を受けて、86年7月14日、教師を中心とする「生徒集会実行委員会」が

結成準備会としてはじまった。この「生徒集会実行委員会」は、9月13日の結成まで、5回開催された。

そして、その間教師側は次のような結論を出す。「高校生が固有に持つ多様な要求に基づいて、自主的で、民主的な、本当に大衆的な高校生運動の創出を計ろう。その中で、学校の枠を越えた、高校生たちの本当の友情と連帯と自己変革が層として生み出されるだろう。こうして、高校生自身が打ち鍛えられ、自立した、運動する集団として立ち現れたときにこそ、愛知私学に真の『人間教育』を行う条件が整うのではないか……。」<sup>(10)</sup>として、「愛知県私立高校生フェスティバル」結成を愛知私教連の教師が全面的に支えることになった。

当初は、1987年1月15日に高校生による単独開催を予定していたが、準備会における生徒と顧問教師団との議論の中で、資金の問題、全面的な企画の実施に関わる準備の問題から、第1回「父母と教師の大集会」に合流する形で開催されることに合意した。

そして、9月13日の結成集会を迎えることになる。ここでは、翌年に独自集会を見通しながら、当面、第1回は「父母と教師の大集会」に合流することを確認し、「私立高校生フェスティバル実行委員会」が結成された。

この、第1回の「私立高校生フェスティバル」が合流することで、既にあった大人たちの集会は、生徒の参加によってはじめて「父母・生徒・教師の全私学人による祭典となった」ととらえ、「父母と教師の大集会」の呼称を「私学フェスティバル」と改称する。

その後、5回の実行委員会開催を経て、11月16日「父母と教師の大集会」を改称した「私学フェスティバル」に合流する形で、「第1回私立高校生フェスティバル」が大高緑地公園で開催された。

そこで「私立高校生フェスティバル」としては、「やってみないか、俺たちの手で」をテーマに、ロックコンサートや合唱、餅つき、ウルトラクイズ、フォークダンスなど多彩な企画を高校生が担うこととなった。

すなわち、高校生フェスティバル誕生の背景には、既にある学校の枠を越えた大人たちの組織と運動があり、それが大きな影響を持っていたこと

になる。このことが、結成時は教師が実行委員長、生徒は副実行委員長という変則的な体制であり、「父母と教師の大集会」に合流する形での第1回の「フェスティバル」開催となったということがいえよう。

しかしながら、「私立高校生フェスティバル」は、すでにあるこのような大人たちの運動に、合流し、「吸収」され、「動員」される性格のものとして出発したわけではなかった。たしかに、大人たちの運動の影響があり、「なぜ、父母と教職員だけなんだ。自分たちもあのようにやりたい」との生徒の要求がおき、父母と教師の集会に合流して第1回の「フェスティバル」が開催されたことはたしかではある。

ところが、その後、高校生たちは教師や父母に守られながらも、大人たちとの協同性と自立性を発揮していく。

## (2) 高校生による実行委員会体制の成立

「私立高校生フェスティバル」としてはじまったこの活動は、およそ半年後の1987年5月4日に、第2回のフェスとして「新入生歓迎フェスティバル」を「笑顔・友情・大爆発」をテーマに愛知県文化講堂において開催する。これは、大人たちによる「私学フェス」に合流する形ではなく、財政的にも自立した高校生の集会として開催された。

87年5月31日、「新入生歓迎フェス」の総括と次期（秋の「高校生フェス」に向けての）役員人事を議論する三役会議で、生徒役員から「実行委員長と事務局長のポストを高校生にくれ」との要求が出され、一定の教師との議論<sup>(1)</sup>を経て、6月6日に生徒による実行委員長、事務局長が選出された。こうして、主体はあくまで高校生によって構成される実行委員会、教師は顧問団として指導援助にあたる、という体制が整うことになった。

そして、教師による顧問団、高校生による実行委員会という体制が整い、以後、半年を一つの「期」として、高校生フェスは春に「新入生歓迎フェスティバル」を、秋に「ビッグフェスティバル」を開催していくことになる。



### (3) 活動の歩み

1986年秋の「私立高校生フェスティバル」、1987年春の「新入生歓迎フェスティバル」を経て、基本的な活動の枠組みが整った高校生フェスの活動は、この後、いくつかの「転換期」を迎えながら現在まで続けられていく。

ここでは、1987年春の「新歓フェス」以降の活動の歩みを概観するが、全ての活動を詳述することはできない。現在の活動につながる、いくつかの「転換点」を中心に見ていくことにする。なお、結成から現在までの春と秋の「フェスティバル」については、次の【表】「高校生フェスティバルの歩み」を参照されたい。

【表】高校生フェスティバルの歩み

開催時期	《開催場所》「テーマ」 ☆主な企画
1986年秋 (第1期)	《大高緑地公園》「やってみないか、俺たちの手で」 ☆800人の大合唱 ☆ロックコンサート
1987年春 (第2期)	《愛知県文化講堂》「笑顔・友情・大爆発」 ☆ミュージカル「やってみないか、俺たちの手で」 ☆高校生バンド
1987年秋 (第3期)	《久屋大通公園》「でっかい秋見つけた」 ☆100名創作合唱「飛べ、力いっぱい」
1988年春 (第4期)	《愛知県勤労会館》「私学大通りを大冒険」 ☆ミュージカル「俺たちのレジスタンス」
1988年秋 (第5期)	《久屋大通公園》「情熱、沸騰点」 ☆第九交響曲ジョイント演奏
1989年春 (第6期)	《愛知県勤労会館》「伝えたい僕らの熱い鼓動」 ☆ミュージカル「ガンバの大冒険」
1989年秋 (第7期)	《大高緑地公園》「目覚めよ、若き魂」 ☆大合唱 ☆豊橋～名古屋平和のリレー
1990年春 (第8期)	《名古屋市民会館》「この日この時この瞬間、輝け未来の勇者たち」 ☆ミュージカル「1990 島原」
1990年秋 (第9期)	《レインボーホール》「LET'S BEGIN～今、ときめきシンフォニー」 ☆生徒、父母、教師の初の三者主催
1991年春 (第10期)	《名古屋市民会館》「好奇心100%～天まで届け僕らの心」 ☆ミュージカル「オズ」 ☆日仏高校生シンポジウム
1991年秋 (第11期)	《大高緑地公園》「元気の原点“心”発見～自分の地図を描いてみよう」 ☆豊橋～名古屋70km平和ウォーク

1992年春 (第12期)	《名古屋市会館, 豊橋勤労福祉会館》「LET'S GO FESTIVAL~秘めた可能性を解き放て」 ☆ミュージカル「大阪城虎の穴」 ☆初の東三河開催 ☆全国高校生フォーラム
1992年秋 (第13期)	《名古屋市公会堂》「やったろうじゃん! 見ろ高校生の活力」 ☆ヒロシマ~名古屋折り鶴平和リレー ☆宗田理トークライブ
1993年春 (第14期)	《名古屋市会館》「THE DREAM'S COMPANY~夢は自分の手で作る!」 ☆ミュージカル「ガンバの大冒険」 ☆オユンナコンサート
1993年秋 (第15期)	《名古屋市公会堂, 勤労会館》「KEEP ON TRYING~挑み続ける勇気~」 ☆合唱構成「山田かまち・17歳のポケット」 ☆創作劇「素晴らしき愚か者たち」
1994年春 (第16期)	《名古屋市会館》「仲間と自分探しの旅にでよう!」 ☆ミュージカル「BELIEVE YOURSELF」 ☆ミュージカル「DIRTY」
1994年秋 (第17期)	《愛知高校》「夢・挑戦・感動・成長~みんなの情熱を学校にふらせよう」 ☆ミュージカル「広島から吹く風」 ☆オユンナコンサート
1995.2月 《神戸》	《神戸》 震災ボランティア ☆「阪神大震災でお父さんとお母さんを亡くした中学生高校生に奨学金を送る会」結成
1995年春 (第18期)	《名古屋市会館》「君が来なくちゃ始まらない~この日から何かが変わる」 ☆ミュージカル「STAND UP~月明かりの下で」/「モモ~時間どろぼう」 ☆薬害エイズ・川田龍平ストーリー ☆江口洋介チャリティーコンサート
1995年秋 (第19期)	《名古屋市公会堂, 鶴舞公園》「みんなで元気に! 学校を元気に!」 ☆豊橋~名古屋 80km平和ウォーク ☆高校生平和フォーラム ☆谷口宗一コンサート
1996年春 (第20期)	《名古屋市会館》「破れ! 自分を! 学校を! つながれ! 世界に! 人間に!」 ☆ミュージカル「ぼくたちとコルチャック先生」 ☆インターネット企画 ☆「海上の森・藤前干潟」環境裁判
1996年秋 (第21期)	《東別院》「常識を越える~仲間と結ぶ, 自分と出会う, 街とつくる」 ☆1000人大合唱「SINGING MESSAGE」 ☆高校生宣言 1996 ☆2000人パレード ☆薬害エイズ被害者講演会 ☆THE BOOM コンサート
1997年春 (第22期)	《名古屋市会館》「何かが変わる第一歩~出会い・夢・感動」 ☆ミュージカル「エスペランサ~希望」 ☆沖縄企画(基地問題) ☆ハイスクールレボリューション企画 ☆インターネットで生中継
1997年秋 (第23期)	《ナゴヤドーム》「夢のタマゴ 大爆発!」 ☆父母・教師との三者主催 ☆高校生国会(いじめ問題) ☆川田龍平さんとの交流会 ☆ゴスペラーズコンサート

1998 年春 (第24期)	《愛知県勤労会館》「輝く自分に会いに行こう」 ☆ミュージカル「主題歌～きみのうたを～」 ☆赤坂泰彦トークショー ☆「楽しい学校って？」シンポジウム ☆クラブ交流会
1998 年秋 (第25期)	《市邨高校》「青春は挑戦だ」 ☆「21世紀宣言」 ☆反核手形運動 ☆ル・クプルコンサート
1999 年春 (第26期)	《愛知県体育館》「私学デー」として父母・教師との三者主催 ☆群舞披露 ☆Toshi ライブ ☆一億円募金始まる
1999.6 月	《愛知県庁記者クラブ》 ☆高校生記者会見
1999 年秋 (第27期)	《久屋大通公園》「道を創れ！」 ☆高校生アピール ☆群舞「新紀元」「GO AHEAD」 ☆スーパースランプリライブ
1999 年 大晦日	《鶴舞公園》“なごややろまい祭り”に参加 ☆年越し2000人太鼓・群舞
2000 年春 (第28期)	《南山高校男子部》「STAR～輝ける軌跡～」 ☆群舞「PARTY TIME」 ☆「居場所を求めて」シンポジウム

※ 高校生フェスティバル実行委員会内資料「高校生フェスティバルの歴史」・高校生フェス「顧問会議資料」をもとに熊沢が作成

1987年秋の「フェス」に向けての創作合唱の準備委員会の中で、生徒たちの学校批判、教師批判が噴出した<sup>(12)</sup>。このような動きと前後して、同朋高校、日本福祉大学付属高校、滝高校、高蔵高校、市邨高校などで校則改善運動が巻き起こった。このころから、高校生フェスという学校外の自主的組織が、各学校内の校則改善を促す指向性を持っていた。

1988年の秋から、県下の全私立高校生に向けて、高校生フェスの機関紙『よ～いDON』（現在は『古今東西』として発行）の定期発行が始まる。また、「高校生フェスティバル学内実行委員会」（学内フェス）が組織化されることになる。そして、教師顧問団も「学内顧問」をおき、各学校内でも寄り添う体制を創り出す。

89年7月に市邨高校において、第1回「サマーセミナー」（サマセミ）が開催された。高校生フェスの活動に触発を受けた教師たちの中から、高校生フェスの“学習版”と位置づけて開催された。

89年秋の「ビッグフェス」では、初めて「前夜祭」を開催し、名古屋の中心地である栄で高校生によるパレードを行った。そしてこの頃から、公立高校の生徒の参加も増加し、「愛知県私立高校生フェスティバル」か

ら「私立」をとり、公立高校も含めた全県的な高校生の自主的自治的活動として「愛知県高校生フェスティバル」と呼ぶようになった。

90年春の新歓フェスでは、他県の高校生の自主的活動組織との交流が始まる。その秋は、レインボーホールで、教師・父母との合同での「フェスティバル」を開催した。これは、第1回のような父母と教師の集会への「合流」という形ではなく、まさに、生徒・父母・教師が同じ地平にたつての三者の主催として開催されたものである。また、この「フェスティバル」では、高校生とその父母や教師という直接的な「学校」の関係者のみでなく、市民の「フェスティバル」参加が始まった。

91年春には、フランスの高校生を呼び、「日仏高校生シンポジウム」を開催した<sup>(13)</sup>。

この年のサマーセミナーから、教師・父母・生徒・市民の「四つ巴」で取り組むことになり、高校生フェス実行委員がそのままサマセミ開催の主体者となってくる。また、フェスの“学習版”——いわゆる「授業版」——としての性格が強かったサマセミが、「理想の学校を創ってみよう」として、生徒会交流の講座が登場することになる。このことにより、高校生フェスの活動が、教科教育的な「学習」活動とも連動しはじめる。同年秋には、豊橋の桜丘高校から名古屋の大高緑地公園までを約1000名の高校生が歩く「平和の火70km徹夜ウォーク」を実施。これには、のべ1500名の父母と教師が「人間ガードレール」として高校生を守った。

1993年6月13日に「学校を考える高校生の集い」を開催し、「生徒が主人公となるための学校をつくるためには、どうすればよいか」として「学校改革」を掲げる各校生徒会の交流組織である「ハイスクールレボリューション」が結成された。

94年12月には愛知県内で起きた「いじめ自殺事件」から社会問題化した「いじめ問題」に対して高校生の立場からの「いじめ声明」を発表する。95年2月にはフェス実行委員が神戸での阪神大震災ボランティアを行い、この経験から「阪神淡路大震災でお父さんお母さんを亡くした中学生高校生に奨学金を贈る中学生高校生の会」（略称・贈る会）が結成される。この頃から、現実の社会問題へ高校生という視点からの社会参加・意見表明

がはじまる。

1997年秋は、ナゴヤドームで父母・教師との協同での「私学フェスティバル」を開催する。しかし、この直後、高校生フェスは解散の危機を迎えた。実行委員会本部が閉鎖され、2ヶ月に及ぶ教師と生徒との議論がつづいた時期もあった<sup>(14)</sup>。

そして、98年春には、「様々な層の生徒の要求にこたえよう」として多様な参加型企画を設定。また一方では、「高校生の思いを文部省に伝えたい」との一人の実行委員の発案から、文部官僚の寺脇研氏を招いてのシンポジウム「ホントにたのしい!? 学校って何?」を開催した。

#### (4) 近年の状況

このような、高校生フェスにおける意見表明や社会参加は、1999年度の活動で大きく質的転換を迎えた<sup>(15)</sup>。

99年、不況の中での税収不足を理由に愛知県当局の「2000年度私学助成30%カット」のニュースが報道される。この不況の波は実行委員の生徒にも押し寄せてくる。この中で、彼らは98年度、「経済的理由」で退学を余儀なくされた高校生が、愛知県内の私立高校で86名を越えたことを知る。既に大人たちは、「私学助成運動」を続けている。生徒実行委員たちは『『経済的理由』で学校を辞めていく仲間のためにおれたちでできることはないか。』と議論を開始する。そして、高校生フェスティバル実行委員会は「私学奨学資金財団一億円募金運動」（略称・一億円募金）に取り組むことを決定する。99年3月、「学費が払えずに学校を辞めていく遠い友だちを見過ごすことは出来ません。この仲間を救おう。この問題にはぼくたちの人生がかかっているのです」と訴え、「一億円募金」運動を開始した。この募金運動は県下の私立高校を中心として各校生徒会も開始するようになる。

この一億円募金を展開する一方で、高校生フェスティバルと各校生徒会は、99年6月に『『私学助成削減反対共同声明』記者会見』を愛知県庁内で実施した。このために、20数校の生徒会長が、5回の事前学習会を開催。「声明文」の原案を作成し、各校生徒会に呼びかけ、34校40生徒会長が

賛同（この数字は併設している6私立中学校生徒会長も賛同している結果である。）し、当日は生徒会長の応援に150名以上の高校生が県庁にかけつけた。

この「記者会見」をうけて、各校の生徒会でも決議文が採択されていく。これは統一的な決議文採択と言うよりも、むしろ各学校によって様々な形で採択された。例えば、日本福祉大学付属高校生徒会は、記者会見の翌日に全校生徒参加で「500名私学助成削減反対緊急生徒総会」を開催し、決議文を県知事に送付。同朋高校生徒会では、全クラスがそれぞれに「私学助成削減反対」決議運動を展開し、全クラス決議が出され、その後、全校生徒の参加による「私学助成大幅カット反対全校集会」を開催した。

前後するが、99年春の「新歓フェス」は、父母・教師との合同で「4.29私学デー」として、愛知県体育館において開催。「500人の太鼓と300人の群舞」をおこない、大きな感動を呼んだ。秋の「ビッグフェス」は久屋大通公園で約1万1000名が参加した。メイン企画として「5000人デモ行進」と「1000人太鼓・群舞」を実施した。「5000人デモ行進」では同時に200名の募金隊が街頭で市民に募金を訴えた。この「太鼓・群舞」の輪は広がり、99年12月31日から2000年1月1日にかけて、鶴舞公園で開催された「なごややろまい祭り」の年越しメインイベントとして、「2000人太鼓・群舞」に参加した。この内の太鼓の中心的存在は日本福祉大付属高校の和太鼓部が占め、「群舞」の踊り手のほとんどは高校生フェス実行委員が占めていた。

そして、2000年春の「新歓フェス」は約1万人が参加して南山高校男子部で行われた。この直前、県内での高校生による「殺人事件」や、九州から広島にかけての「バスジャック事件」が相次ぐ中で、「居場所を求めて」と題したシンポジウムを開催。生徒や父母、教師、市民300名を集めた。この議論を受けて、サマーセミナーでは「学校を考えるシンポジウム」をフェス実行委員会を中心に開催。現在も秋に向けての学習活動を続けている。また、新しい形の群舞としてメイン企画で行われた「PARTY TIME」は、400名の生徒と青年教師が踊っていた。この「群舞」の輪はさらに広がり、8月に開催された「日本ど真ん中祭り」に「愛知県高校生フェスティ

バル実行委員会チーム」として出場し、ますます、学校やフェスの枠を飛び出し高校生自身がまさに市民として地域に飛び出している。

### 3. 高校生フェスティバル実行委員会の組織と活動

これまで見てきたように、高校生フェスの活動の歩みは、学校とフェス、さらには現実の社会との触発と環流を生み出してきた。多くの「地域」における子ども・青年の自主的活動組織や地域の子育て運動が、学校の外での固有の活動の内実を豊かに発展させながらも、80年代後半以降それまでの発展を横這い状態にとどまっている状況があり、これらの課題として、一定の階層やニーズをもつ人々の目的追求型組織から、いかに脱皮するかが問われている<sup>(16)</sup>。

その意味では、80年代後半に生まれた高校生フェスが、このような動的な〈触発と環流〉を生み出してきた重要なファクターとして、高校生フェスの組織と日常的な活動がある。

高校生フェスの実行委員会は、春と秋の「フェスティバル」を開催するという目的追求型の組織という側面を持つが、その目的追求をその組織内で自己完結させるものではなかった。むしろ、そこから派生する多様な要求にこたえる、多様な組織を生み出してきた。その意味では決して「一枚岩」的な組織ではない。

浅野誠は、学級集団づくりにおける組織論として、「多様な集団の多様なあり方として把握し、それらの多様な組織の多様なあり方を育てつつ、それらの間の豊かな関係をとらえていく」として「集団づくりの新しい展開」を提起していた<sup>(17)</sup>。この提起は、高校生フェスが目的追求型組織にとどまらず、そこから生まれた多様な組織とつながりながら、学校や社会との触発と環流を可能にしてきた、組織のあり方や関係の内実を探る一つのヒントとなる。

#### (1) 高校生フェスティバル本部実行委員会

高校生フェスの実行委員会は愛知私学会館内に本部を置き、約60名の

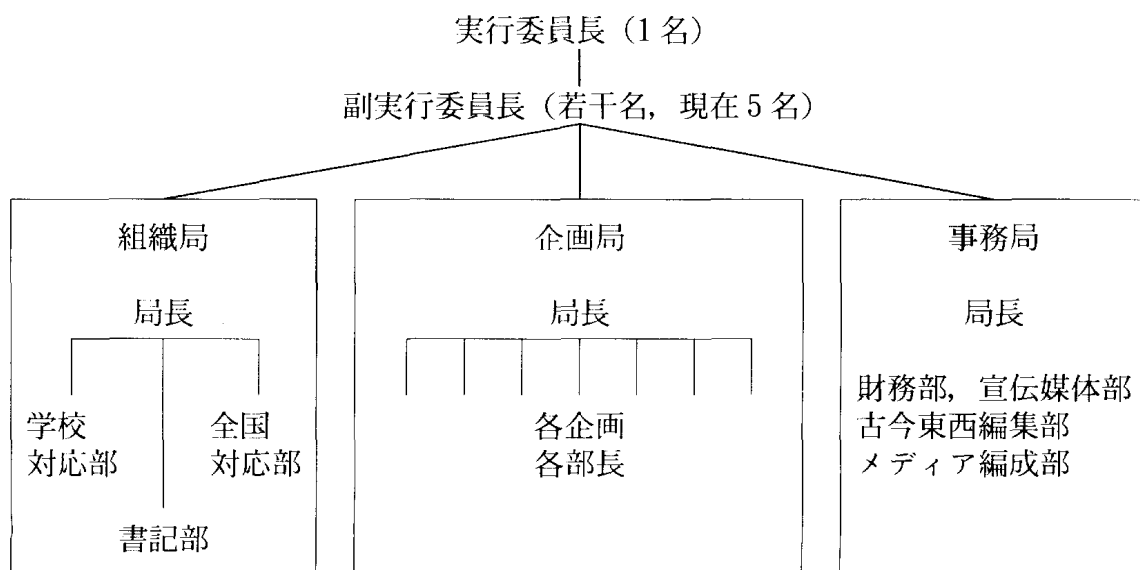
本部実行委員が活躍している。まずは、この本部実行委員会の組織とこの組織による春と秋の「フェスティバル」開催に向けての日常的な活動を試みよう。

本部実行委員会のリーダーは、実行委員長（1名）をはじめ、副実行委員長（定数なし、現在は5名）、事務局長、組織局長、企画局長（各1名）の、「5役」と呼ばれるリーダーがいる。彼らは、半年ごとの「フェスティバル」が終了した最初の全体会において、立候補または推薦を受けて、出席した実行委員の生徒の投票によって選出される。第29期の現在は、2000年6月3日の全体会において選出され、県立高校3年の女子生徒が実行委員長となっている。

彼らが「フェスティバル」開催に向けて、活動のリーダーとなり、毎週月曜日に5役会議を開催している。いわばフェスの「最高幹部会議」である。ここでは、各局の状況、各学内の状況の報告と今後の活動方針案などが議論される。

本部実行委員会は【図1】に見るように、事務局長、組織局長、企画局長をリーダーとして、毎週木曜日に各局会議を開催し、それぞれ活動している。

【図1】高校生フェスティバル本部実行委員会組織図



※「高校生フェスティバルホームページ」のものをもとに、2000年8月現在の状況に合わせて熊沢が修正して作成



### ・事務局

事務局は、次の4つの部に分かれ、財政の管理状況、企業への広告とり、写真等資料の整理、機関紙『古今東西』の記事の編集方針の議論や編集作業、ホームページの管理・更新などが行われている。

- ・財務部……財政を扱い、必要経費の支払いや、企業と交渉して機関紙『古今東西』やフェス当日、参加者に配布するパンフレットなどに載せる広告を確保する。
- ・宣伝媒体部……フェスティバルに関するポスターやチケット、パンフレットの作成管理を行う。
- ・『古今東西』編集部……フェスの機関紙である『古今東西』（年5回）を編集・発行している。
- ・メディア編成部……フェスの活動の様子を、写真・ビデオ等で撮影し、記録する。また、ホームページの管理・運営を行う。

### ・組織局

実行委員の募集や各学校同士、本部実行委員会と各学校、他県（さらには他国）の高校生の自主的活動組織との連絡を図る。本部実行委員会での議事録も組織局が作成・管理することになっている。また、本番の「フェスティバル」で恒例となっている企画の「1分間学校紹介」は組織局が参加する学校を募集し、当日もこの企画の運営を行う。

- ・学校対応部……各校の代表者との連絡を行い、「学校代表者会議」の開催・運営を行う。ここが、本部実行委員会と各学校とをつなぐ窓口の一つになっている。
- ・全国対応部……他県にある高校生の自主活動組織との連絡・交流を図る。
- ・書記部……本部実行委員会における会議の記録、アンケートの集計、全体会やフェスティバルでの参加者や実行委員の名簿の管理等を行う。

組織局によって毎週水曜日に開催される「学校代表者会議」がある。各学校の代表者がフェス本部に集まり、本部実行委員会の状況が各学校に伝えられ、各学校の状況が他校や本部実行委員会に伝えられる。

そこでは、各学内フェスの活動や生徒会、文化祭実行委員会などの学内での様々な自主的な活動の状況が報告・交流、本部実行委員会の状況の報告、本番の「フェスティバル」や諸交流会の企画参加の要請や確認などが行われる。この学校代表者会議では、本番の「フェスティバル」を見据えた議論が中心となるが、この議論の中では、後で述べる生徒会文化祭交流会的な話題も議論されることもある。たとえば、校則改正運動を実施している学校などではその進展状況の報告などもされる。それが他校の校則改善への触発となる場合もあるし、また既に校則改善を経験した学校からのアドバイス等もされる場合もある。

### ・企画局

企画局では、本番の「フェスティバル」へ向けての諸企画が議論される。企画局の実行委員がそれぞれ自分のやってみたい企画を提案し、担当者となる場合が多い。提案された全ての企画は、実現可能性はともかく全て議題として実現に向けて検討される。もちろんここで「ボツ」になる場合もあるが、原則として実現に向けて検討され、不可能との判断はその企画を提案した担当者自身が決断することになる。このスタイルが、これまで一見無謀とも思われる企画を多数実現している。例えば、「フランスの高校生を呼ぼう」「馬といっしょにパレードしたい」「文部省の役人を呼びたい」など次々と実現されていった。

本番の「フェスティバル」における企画のほとんどがここで決定されるといってよい。そこで提案されるそれぞれの企画が「部」として位置づけられる。また、本部実行委員会の中で最も実行委員数が多いのも企画局である。ここに、きわめて多様な企画が生まれる。

2000年5月4日に開催された企画をここに紹介しておく。

- ・前夜祭企画……4月16日に名古屋の栄小公園周辺で開催。約800名が参加し、クラブ発表、群舞発表、生徒会の訴え、一億円募金の街頭募金を行った。今回は実施しなかったが、パレードを行うことも多い。
- ・メイン企画……これは、企画局のみではなく、5役はじめ本部実行委員会全体で取り組む。今回は400名による群舞「PARTY TIME」

が行われた。

- 学校改革シンポジウム企画……時代や社会と関わる「硬派」な企画の一つである。今回は「居場所を求めて」をテーマに、生徒のみならず父母や教師、研究者をシンポジストに招いて実施。
- 模擬店企画……各学校の学級・クラブなどが出店。その統括及び保健所への連絡、許可申請、ゴミ処理の管理を行う。
- クラブ発表企画……各校のクラブ発表をステージで行う。そのための参加募集・確認。
- 芸能人企画……今回は元プロボクサー薬師寺保栄氏のトークショーを実施。プロダクションとの連絡・交渉を行う。
- 高校生バンド企画……事前に「バンドフェスティバル」として出演バンドのオーディションを行い、勝ち抜いた4つの高校生バンドがステージで演奏。

他に、スポーツ企画(綱引き大会)、遊び企画<sup>(18)</sup>(カラオケ・ゲーム)、文化部・文化祭交流会企画、野点企画、香水企画、メイクアップ講座企画、マジック企画、叫べ企画、創作企画、一億円募金企画など、高校生の固有で多様な要求に基づきこれらの企画の実施に向けて、実行委員の生徒が準備活動をする。そして、それぞれの企画が「部」となって活動するが、企画によっては担当の「部長」1名のみという企画もある。これらの企画の内容によっては、企画参加者を集めて練習や打ち合わせ、学習活動が連日おこなわれることになる。例えば、シンポジウム企画においては、学習会や取材活動が実施されていた。400人での群舞は連日のように、ダンスインストラクターの指導を受け、学校や公園を会場に全体練習会、さらには各学校での練習会が実施されていた。

他に企画局には、

- 舞台部……ステージの設営やそれに関わる看板等の装飾、音響、照明、タイムテーブルの作成などを行う。それに伴う音響や照明、ステージ業者との交渉。
- 要員隊……受付、美化、警備等のいわゆる「要員」。実行委員以外に友だちや教師に誘われ当日のみ要員として参加する生徒も多く、その

募集，任務分担を行う。  
がある。

### ・「役員」会議

毎週開催されるわけではないが，火曜日に「役員」会が開催されることが多く，比較的頻繁に開催されている。いわゆる「最高幹部」である5役のメンバー以外にも広く議論が必要な場合に開催される。

また，「役員」といっても特にそのメンバーが，決まっているわけではない。5役と各局の次長，部長が役員会の対象となろうが，必ずしも彼らだけとは限らない。そのような「役職」についていなくても「われこそは」と思う生徒や，「これについては〇〇さんの意見も是非聞きたい」と実行委員が考えれば，出席することが出来る。

むしろ，この「役員」会で新たな活動スタイルや方針が提案されることが多い。これは，ある種の「ルーズさ」ともいえるが，「出入り自由」の任意参加組織である高校生フェスの大きな特徴ともいえる。

### ・合宿

各期1回（春休み中と夏休み中），本部実行委員会の中心的な生徒で1泊2日の合宿を行っている。数名の教師顧問も参加する。

この合宿では，本番の「フェスティバル」の方針と諸企画の基本的な骨格が検討され，この合宿以降本格的な準備活動に入ることになる。しかし，この合宿ではまず，生徒たちが「なぜ自分は，このフェスをやっているのか」を語り合うことに時間をかけている。ここで，実行委員になったきっかけや，やめようと思ったこと，家族との関係などをそれぞれが語ることになる。この「語り」の時間を重視することで，本部実行委員会の仲間意識が強まっていくことになる。

そして，1日目の夕食後に顧問団から生徒実行委員たちへの「問題提起」が行われる。この「問題提起」は，これまでの実行委員が活動してきたことへ評価や意味づけ，検討している方針や諸企画の意味や実現のための課題，問題点の指摘が中心となるが，教師自身のアイデア，挑発的発言など

も含まれる場合がある<sup>(19)</sup>。

1日目は、教師顧問団の「問題提起」のあと、若干の全体討論をするが、実行委員たちはこの「問題提起」を受け、各自の部屋で自分たちの方針や諸企画を再検討することになる。中には朝方まで討論をするグループもあった。そして、2日目には各部屋での再検討の結果を踏まえ、合宿後の活動の方針を決定していく。

#### ・全体会（各期3回開催）

本部及び学内の高校生フェスティバル実行委員が結集するのが全体会である。原則として、本番の「フェスティバル」後に、「総括及び結成全体会」として、終了した「フェスティバル」の総括と次期の5役選出を兼ねて開催される。これが第1回の全体会となる。第2回は、次に開催される「フェスティバル」のテーマや諸企画案の承認を行い、その後、学内実行委員も含めて、諸企画の具体的な準備や参加クラブ、模擬店、当日の要員などの募集に取りかかる。例えば、300人での群舞の企画もこの全体会までに中核メンバー10名～20名ほどが形成されるが、この全体会以降、参加メンバーが爆発的に増加していく。そして、本番「フェスティバル」直前に開催されるのが第3回全体会である。ここでは、諸企画の最終的な準備状況や本番前日当日の全体の段取りを実行委員全体で共有することになる。テントの設営時間から、ステージ発表のための入場時間、配置までの確認がされる。また、必要な場合はリハーサルが実施される場合もある。

#### (2) 高校生フェスティバル学内実行委員会（略称・学内フェス）

以上あげたのが、本部実行委員会の組織と主な日常的活動である。そして、この本部実行委員会と並んでフェスティバルの実施に向けて重要な役割を果たすのが「学内フェスティバル実行委員会」である。

この学内フェスティバルによって、フェスティバルで活性化された多様な自主的活動が、各学校に環流され、各学校の優れた自主的活動が本部のフェスティバルの新たな活性化を創り出している。

多様な学校の生徒が結集しているが故に、各学校によって様々に事情が

異なる。そのため、学内フェスの形態は多様であり、学校によって位置づけがかなり違っているが、いくつかの形態に分けることができる。

- 生徒会＝学内フェス型……これは、学内のフォーマルな組織である生徒会がそのままフェスに結集し、学内フェスとなっている場合である。生徒会執行部を中心としつつ、それ以外の有志によって学内フェスが形成される場合もある。
- 独立公認型……これは、学内フェスそのものが学校のフォーマルな組織として公認され、独立して組織されている場合である。ただしこれには、a.独立した活動を展開しつつも、生徒会などその他の学内自主的活動組織と連携している場合と、b.完全に独立し、他の学内組織と接点を持たず、もっぱら本部フェスの活動に関わるのみの場合がある。
- 地下組織型……学校のフォーマル組織として公認されず、また生徒会との組織的接点がない場合。また、学内の文化祭等の自主的な活動の場面では、表面にでてこない場合。
- インフォーマル独立型……学内のフォーマルな組織として公認されているわけではないが、実質的には学内フェスを形成し、学内の行事等でも、表舞台で活動を展開している場合。
- クラブ寄生型……学内フェスそのものとして独立はしていないが、特定のクラブ（部活）が、実質的に学内フェスティバルとしての活動をおこなっている場合。
- 行事プロジェクト型……春・秋のフェスティバルや学内の行事ごとに有志メンバーで組織され、実質的な学内フェスとなっている場合。
- その他……学内フェスの形成そのものが困難な場合。少数の本部実行委員が学内フェス実行委員を兼ねているが、実質的には学内での活動が困難な場合。

こうした多様な学内フェスの形態があるし、実態として上記の複数の形態を含み込んだ性格のものもある。また、様々な学校の事情があるため、統一することはきわめて困難である。本部実行委員会も顧問団も学内フェスのあり方を統一しようとはしていないようである。ただ、現状の多様な学内フェスのスタイルから、本部フェスと学内フェスの有機的な連結を生

み出すための共通の要素を検討する必要がある。

### (3) 「きょうだい」組織

これまで見てきた、本部実行委員会と学内フェス実行委員会がいわゆる高校生フェスの「実行委員会」となる。しかしながら、この「実行委員会」のみが高校生フェスの全体像をあらわすものではない。そこから生まれた多様な組織も含めて高校生フェスを把握する必要がある。高校生フェスの生徒たちは、以下二つの組織を「フェスのきょうだい」組織と呼んでいる。

#### ・ハイスクールレボリューション（略称・ハイレボ）

ハイレボは、高校生フェスの活動から生まれたもので、各校生徒会の交流組織である。

高校生フェスの活動初期の頃から、実行委員会では校則への不満が噴出し、一部の学校ではそれが学内の校則改正運動を生み出していたが、当初そうした「学校改革」はフェスの方針として明確に位置づけられていたわけではなかった。

1991年から「学内活動の活性化」を方針として掲げ、それぞれの学内フェス実行委員会の活性化と、学内フェス同士の活動の交流を活発に行った。この時、活性化した名古屋大谷高校の実行委員が次々と生徒会に立候補し、それまで停滞していた生徒会を立て直すことになった。

そして、92年3月「僕らの出発学園」という生徒の自主的活動交流会を開催し、そこで「学校改革宣言」を採択した。ここから、高校生フェスがそれぞれの「学校改革」を明確に打ち出すことになる。同年春の「新歓フェス」では「学校改革」をスローガンにした「2000人パレード」を実施。同年秋のフェスでは「生徒会交流会」を初めて開催した。さらに、93年春の「新歓フェス」ではメインの企画であった「ミュージカル」と同じ時間帯に開催したにもかかわらず「生徒会交流会」に37校120名以上の生徒が参加した。この交流会で「またこのような生徒会が集まり話し合う機会をつくろう」という提案が出され、その場で36人の生徒が準備委員に立候補した。

このような流れの中で、1993年6月13日に「学校を考える高校生の集い」を開催し、「生徒が主人公となるための学校をつくるためには、どうすればよいか」をテーマとして「学校改革」を掲げる各校生徒会の交流組織である「ハイスクールレボリューション」が結成された。

高校生フェスティバルという有志のインフォーマル組織が企画した「生徒会交流会」がきっかけとなり、学校公認のフォーマル組織である生徒会が動きだし、その交流組織として学校改革をめざす「ハイスクールレボリューション」を創り出したのである。これに参加した教師は「学校改革」へ向かう、「生徒たち自身の力」を感じ、「本当に『学校』が変わるのではないか」という、ひしひしと迫る予感を感じたという<sup>(20)</sup>。

この「ハイレボ」は、フェスから生まれたものだが、「学校改革」をめざす各校生徒会の交流組織として、本部実行委員会から一定の独立性を有しつつも、密接な関係を持ち、本部実行委員会ではハイレボの担当をおいている（現在の第29期では、本部副実行委員長の一人がハイレボ担当となっている）。ハイレボは、本番の「フェスティバル」における生徒会交流、「学校改革」に関わる活動や企画へ合流し、学校シンポジウムや高校生宣言などの声明文など生み出してきた。また、高校生フェスと協同して、「生徒会文化祭交流会」（6月）や「スプリングセミナー」（2月）を開催している。

生徒会文化祭交流会では、各校の生徒会や文化祭実行委員会の交流や生徒会活動、文化祭に関わる情報交換がなされる。生徒会の交流では、多様な生徒会活動の報告と交流がされる。ここでの報告が他の学校の生徒会活動を触発したり、類似した活動を既に経験した学校からはその経験等がアドバイスされる。また、この交流会を機に、学校ごとの生徒会交流が日常的に始まることもある。文化祭については、文化祭全体の取り組みから、各クラス企画をどうするかという、大変具体的な発表（例えば、「教室プラネタリウムの作り方」など）もある。また、この生徒会文化祭交流会では、ボランティア交流や文化部交流などの分科会も開催される。スプリングセミナーでは、この規模を大きくし、他県の高校生徒会などの自主的活動組織を招き交流を図っている。



各校生徒会での一億円募金運動の取り組み、99年6月の各校生徒会長名で「私学助成金削減反対」の記者会見を実施したのもハイレボが高校生フェスと連携して各校生徒会に呼びかけられたものであった。

・「阪神淡路大震災でお父さんお母さんを亡くした中学生高校生に奨学金を贈る中学生高校生の会」(略称・贈る会)

長い名称ではあるが、1995年1月に「阪神淡路大震災」がおき、フェス実行委員の生徒による「神戸ボランティア」がきっかけとなり、かれらを中心に結成したものである。すなわち、高校生フェスから生まれたボランティアサークルである。

現在も毎月17日に栄で街頭募金を行い、震災で両親をなくした中高生に奨学金を贈っている。99年度までに、のべ250名の震災遺児に、合計1700万円以上の奨学金を送ってきた。

「贈る会」のメンバーには、フェス実行委員を兼ねている者も多い。春と秋の「フェスティバル」やサマーセミナー、生徒会文化祭交流会(スプリングセミナー)などの活動には、ボランティア交流などの企画で合流する。年2回の神戸フィールドワーク(体験ボランティア)をフェス実行委員会とともに開催している。また、現在はフェス本部の副実行委員長の一人がこの「贈る会」の担当となっている。

神戸フィールドワークは6月と1月に1泊2日で「贈る会」を中心に実施される。現在も残る仮設住宅や復興住宅、ケアハウス、また、現在も活動を続けている現地のボランティア団体や教会の活動に参加し、ボランティア活動を体験している。

このフィールドワークには、本部実行委員も多数参加する。というのも、募集のチラシを教師顧問団や私教連に加盟する各学校に配布したり、公立高校にも本部実行委員や「贈る会」メンバーの生徒によって参加者を募るためである。また、これまでフェスも贈る会の活動もしたことの無い生徒が参加することも多い。そして、このフィールドワークから、フェスの実行委員になったり、贈る会のメンバーになる生徒も出ている。

#### (4) フェスから生まれる多様な活動

ハイレボや贈る会は、フェスの活動から生み出され、それぞれの目的を持った新たな組織であるが、それぞれがフェス実行委員会と関わりながら活動を続けている。この他にもこのフェスから生み出された多様な組織と活動がある。

##### ・サマーセミナー生徒実行委員会

1989年に「フェスの“学習版”」として、私教連の教科懇談会を中心にはじまったもので、当初は参加者、講座の受講生としてフェス実行委員は参加していた。92年のサマーセミナーで、「学校行事」として青年教師と協同でサマーセミナー後夜祭を企画。以後、サマーセミナー生徒実行委員会を高校生フェス実行委員会から組織して、主催者の一翼を担うようになった。現在では、生徒が講師として開催する講座や、フェス本部実行委員会が開催する講座がある。また、後夜祭の他、「昼休み企画」などを生徒実行委員が担っている。

##### ・地域フェスティバル生徒実行委員会

発足当初合流した父母と教師による「私学フェスティバル」が、88年に愛知県下10会場で行われた。以降、90年のレインボーホールと、97年のナゴヤドームでの「私学フェスティバル」を除いては、多数の会場で開催されることが多くなった。現在は35会場で行われている。これを「オータムフェスティバル」もしくは「地域フェスティバル」と呼んでいる。全ての会場ではないが、高校生フェス実行委員の生徒の在籍する学校や居住する地域に該当するところで「地域フェス生徒実行委員会」を組織し、高校生による企画を担当している。

##### ・私学奨学資金財団一億円募金（略称・一億円募金）

「一億円募金」をはじめた経緯は既に述べた。現在、フェス実行委員会は、あらゆる活動の場でこの一億円募金を位置づけている。本番の「フェスティバル」やその前夜祭の会場で、生徒会文化祭交流会などの様々なフェ

スの活動の企画で募金運動を位置づけたり、本部実行委員会主催による一億円募金学習会も開催している。また、一斉募金行動として、各校に呼びかけ駅前ターミナルなどで開催している。2000年7月15日には「一斉ターミナル募金」として、県下8カ所で募金行動を展開した。本部実行委員会はこの募金行動に「花を添える」ために、和太鼓部やブラスバンド部に演奏を依頼し、この演奏をバックに募金を呼びかけるという「演出」もおこなっている。募金に参加する各学校の中には、演劇部の大道芸を披露したり、ギターの弾き語りをしてしながら訴えるところもあった。

この一億円募金は、生徒会の取り組みとして23校が位置づけている他にも、各校それぞれの取り組みとして多様な形で展開されてもいる。生徒会が定期的に学校近くの駅前で募金活動を実施している学校も多い。また、生徒総会で「募金運動への協力決議」を採択し、生徒会の取り組みとして、学校の近くの駅前で募金活動を実施したところ、生徒会執行部が呼びかけ、学年議長団、学内フェス実行委員が連携し、和太鼓・ボランティア部の協力により、募金を実施したところ、学内フェス実行委員会が群舞を披露しながら授業後に学校内で募金を実施したところ、学校行事で学内フェスと父母が協力して募金箱を設置したところ、学校の近くの商店街で店主の了解を得、募金箱を設置したところなどがあった。

また、今年6月には、「合同募金月間」として父母懇との協同による一斉募金行動を県下10カ所で実施した。

今年7月20日から23日に開催されたサマーセミナーでも、会場で募金活動を実施したり、一億円募金をテーマに生徒が自ら講師となって、「一億円募金講座」を開講した。また、この期間中の21・22日は、大門商店街の夏祭りに群舞とともに、会場で募金活動をおこなった（この経緯については次の「群舞」の項で述べる）。

### ・「群舞」

高知の「よさこい踊り」に端を発するが、この影響を受けた北海道の「YOSAKOI ソーラン」<sup>(21)</sup>のように、鳴子を持って音楽に合わせて集団で踊るというものである。99年の「私学デー」における和太鼓と群舞には

じまり、今や春と秋の「フェスティバル」のメイン企画に位置付いている。大量の生徒が参加できるため、この群舞はフェスにおける「参加装置」としての役割を果たしている。この鳴子踊りが、フェスの生徒たちにも大いに人気を呼んでいる。

こうした中から、この群舞を愛好する集団が形成され、「フェスティバル」以外の場面で彼らは鳴子を手に様々な場面で登場することになった。フェスの生徒たちはこの集団を「群舞隊」と呼ぶ。昨年は、各校の文化祭にも登場したが、学校やフェスの枠を越えて多様な市民とも連携をはじめた。例えば、今年7月、名古屋市中村区の大門商店街から「夏祭りのパレードとステージでやりたいので、踊りを教えて欲しい」と依頼され、その練習会に高校生が指導者として出向く。そして、そのかわりに祭り中に商店街での一億円募金実施の許可を取り付け、祭りに参加する。彼らは、募金活動を行い、その後のパレードやステージで、商店街の人々とともに踊っていた。また、ここで特徴的なのは、募金だけをする生徒や、踊りだけをする生徒が少なくない人数で存在していることである。

他にも、この「群舞隊」は、愛知県の大学生たちが99年からはじめた「日本ど真ん中祭り」にも参加する。99年には、フェス実行委員の一部有志とその友人で「たまたま」参加していた<sup>(22)</sup>が、今年は「高校生フェスティバル実行委員会チーム」として出場をしている。彼らは、フェス実行委員内外の群舞を愛好する生徒に参加を呼びかけ、サマーセミナーの模擬店で「ど真ん中祭り」の参加費を稼ぎ、唯一の高校生だけで構成するチームとして、3日間この祭りに出場した。

### ・高校生バンド

これまであげてきた活動や組織は、本番の「フェスティバル」のみならず、高校生フェスとの日常的な活動で密接に関わっているものであった。それらとは、明らかに性格が異なり、高校生フェスとは日常的な接点はほとんどない、きわめて多様な高校生の組織と活動が多数存在する。これらは、高校生フェスのもつ組織のあり方を検討する上で、重要な視点となるため、その例の一つとして、高校生バンドを取り上げる。

春と秋の「フェスティバル」において、87年春の「新歓フェス」以来つづいている企画が、高校生バンドである。事前にオーディション（現在、「音楽フェスティバル」として120名ほどの観客も入場している）をおこない、選ばれた4バンドが本番の「フェスティバル」のステージで演奏する。

オーディションや「フェスティバル」に参加する高校生バンドは、日常的にはフェスとの接触がない層の高校生がほとんどであるといっていよい。もちろん、たまたまフェスの実行委員がバンドを組んでおり、オーディションに参加したり、オーディションがきっかけで参加したバンドの生徒がフェスの実行委員になることもあるが、バンド以外のフェスの活動に、全く参加しない者が圧倒的に多い。

ただ、その一方でオーディションで聴いたバンドが気に入り、そのバンドのファンとなる生徒も多く、フェスとは全く別のところで彼らがおこなうライブの情報を交換したり、ライブに参加する実行委員も少なくない。また、参加した高校生バンドの中には、本番の「フェスティバル」以外の活動、例えばサマーセミナーの昼休み企画のステージで演奏を実行委員に依頼され、演奏するバンドもある。

高校生バンドは、フェスによって組織化されたわけでもないし、日常的に活動に参加するわけでもない。彼らはバンドとして発展していくために活動を続けているが、フェス実行委員の生徒と何らかの形でつながり、演奏を披露するという点で、フェスの活動に合流している。

#### 4. 支援組織

高校生フェスティバル誕生の背景には、愛知父母懇や愛知私教連を中心とする父母と教師の学校の枠を越えた運動があったのは既に述べたとおりである。高校生フェスの活動において、父母や教師の支援は欠くことの出来ないものとなっている。ここでは、支援組織としての父母懇と愛知私教連及びそれを中心として組織されている教師顧問団の活動をここに取り上げる。

### (1) 私学をよくする愛知父母懇談会（略称・愛知父母懇）

愛知父母懇は、会員数約15万人にのぼる愛知私学に通う生徒の父母組織である。学校単位のPTAとは別組織で、父母の学校の枠を越えた自主的自発的組織である。もちろん学校によっては、PTA会員がほとんど父母懇会員というところも存在しているが、それはたまたまそうになっているだけである。また、父母懇を基盤に直接PTAを変えようとしたり、学校運営に影響を与える別組織をつくらうという方針は全く持っていない。あくまで私学助成・私学の教育をよくするという要求だけで一致する運動体である。だから、正当性は、思想信条に関係ない広い力を結集し、県政を動かし市（県）民権の認められた団体となっている<sup>(23)</sup>。

その父母懇は、高校生フェスの日常的な活動に対して、直接的な指導的活動をしているわけではないが、この活動を父母懇が承認し協賛することで、実行委員の父母の理解を間接的に作りだし、生徒実行委員の活動の保障をやすくしている。

また、「フェスティバル」の開催においては、警備、炊き出し、財政的援助やチケット普及、企画への参加、炊き出しなどの支援を行っている。例えば、91年秋の「フェスティバル」のメイン企画「平和の火70km徹夜ウォーク」では、700名の父母と67名の教師（途中から加わった父母と教師を入れるとのべ1500名にのぼった）が、「人間ガードレール」となって、豊橋の桜丘高校から名古屋の会場まで徹夜で歩く1000名の参加生徒を守り抜いた<sup>(24)</sup>。また、99年12月31日から2000年1月1日にかけての「2000人太鼓・群舞」のカウントダウンでは、400名の父母と教師が警備要員として生徒たちを守り、炊き出しや模擬店で生徒たちを支えた。

### (2) 愛知私教連及びフェス教師顧問団

高校生フェスの活動において、生徒の実行委員と「両輪」の関係にあるといえるのが、教師顧問団である。教師顧問団には、主に本部実行委員会に対して、指導及び援助を行う本部顧問。各学校の学内フェス実行委員会に対して、指導及び援助を行う学内顧問がある。

2000年8月現在では、19校26名の本部顧問団、31校約50名の学内顧

問がいる。ただし、この数字は固定されているわけではなく、大幅な変動はないが、毎年若干の上下をする。本部顧問は十数校から二十数校で二十名から三十名、学内顧問は三十校前後で五十名前後となっている。彼ら教師顧問が、学校内外で生徒実行委員に寄り添い、指導や援助をおこなっている<sup>(25)</sup>。

教師顧問団のほとんどは、愛知私教連に結集する教師で、そこでの自主活動部・自主活動担当者としてその任につく者が多い。そして、本部顧問団の内の7名は愛知私教連自主活動部の中央執行委員として、高校生フェスの本部顧問を務める。その意味では、愛知私教連が高校生フェスに対して「責任をもって」その指導と援助にあたるという体制が出来ている。

本部顧問団は毎週月曜日の夜間に、「本部顧問団会議」を開催している。ここでは、1週間の本部実行委員会の活動状況の報告と交流、教師の側からみた各学内の自主的活動の状況の報告と交流がなされる。ここで、実行委員の生徒の本部での活躍や学内での活躍などが教師間で共有されることになる。

そして顧問団会議の状況は、愛知私教連の中央執行委員会議や各学校の組合委員長、書記長によって開催される委員長・書記長会議において議題の一つとして自主活動部の報告がなされる。このような形で、愛知私教連に加盟する全ての私立高校へ、この会議を通じて伝えられる。こうして、私立学校については、本部顧問のいない学校に高校生フェスの活動の状況が共有されることになる。

しかしながら、高校生フェスの教師顧問団の活動は、愛知私教連の組合からその担当者として派遣されると単純に言い切れるものではない。本部顧問団の中には、高校生フェスの活動に魅せられ、県立高校の教員や公立小学校の教員、また市民（職業は大工）として顧問団に加わっている者もいる。また、愛知県下の私立高校の教員でも、自らフェス顧問に立候補する者や、校務で生徒会担当者となったことがきっかけでフェス顧問となる者、学校で実行委員をしている生徒に見込まれ、「フェスの顧問になってくれ」と口説かれる形で顧問になっている者も少なくない。多様な形で顧問団に加わっている場合がある。

すなわち、高校生フェス教師顧問団は、第一に、愛知私教連という私学教員の労働組合が、その指導に責任を持つ形で継続的に高校生フェスに寄り添い、指導や援助をおこなっている。第二に、組合が責任を持ちながらも、単純に組合活動の一環といいきれるものではなく、組合活動の枠を越えた教師や市民の自発性や生徒実行委員の要求に基づいて形成されているということが出来る。

教師顧問団は、生徒の要求を実現することを原則として、「フェスティバル」での多様な企画の教員側の担当者を決定する。企画の内容によっては、それについての詳しい教師が顧問団外から要請されて担当となることもある。

例えば、「フェスティバル」やそれに向けての練習会場の確保や申請の検討を生徒とともにおこなう。その中で、未成年者による申請が不可能なものは、顧問教師の名において申請することになる。他にも、資材を搬入・搬出する際のトラックの運転など、高校生に不可能なこと、すなわち大人でなければ出来ないことは顧問団の教師がおこなう。そして、警備などの顧問団の教師だけでは人数的に足りない場合、私教連からの要請によって、各学校の教員が要員となる。

参加の要請や確認は生徒たちの学校代表者会議においても実施されているが、教師顧問団も参加の要請や確認を教師同士でおこなったり、自己の所属する学校でそれに該当する生徒に参加を要請する場合もある。そして、教師顧問団で把握・確認している参加者数と生徒実行委員が把握している参加者数を付き合わせて、最終的な参加状況を確認している。

一億円募金や群舞、生徒会文化祭交流会などの本番の「フェスティバル」以外の活動にも顧問教師の担当をつけ、生徒実行委員へ日常的な寄り添いと指導をおこなう。

また、月に1回程度、5役会議か「役員」会議において、本部顧問団より、「顧問団長問題提起」がされる。そこでは、生徒実行委員会の現在の状況の評価や励まし、教師顧問団の状況を伝えたり、生徒実行委員会の抱える問題を指摘し強く迫ることもある。

このように見ると、教師顧問団の動きとしては次のような側面がある。

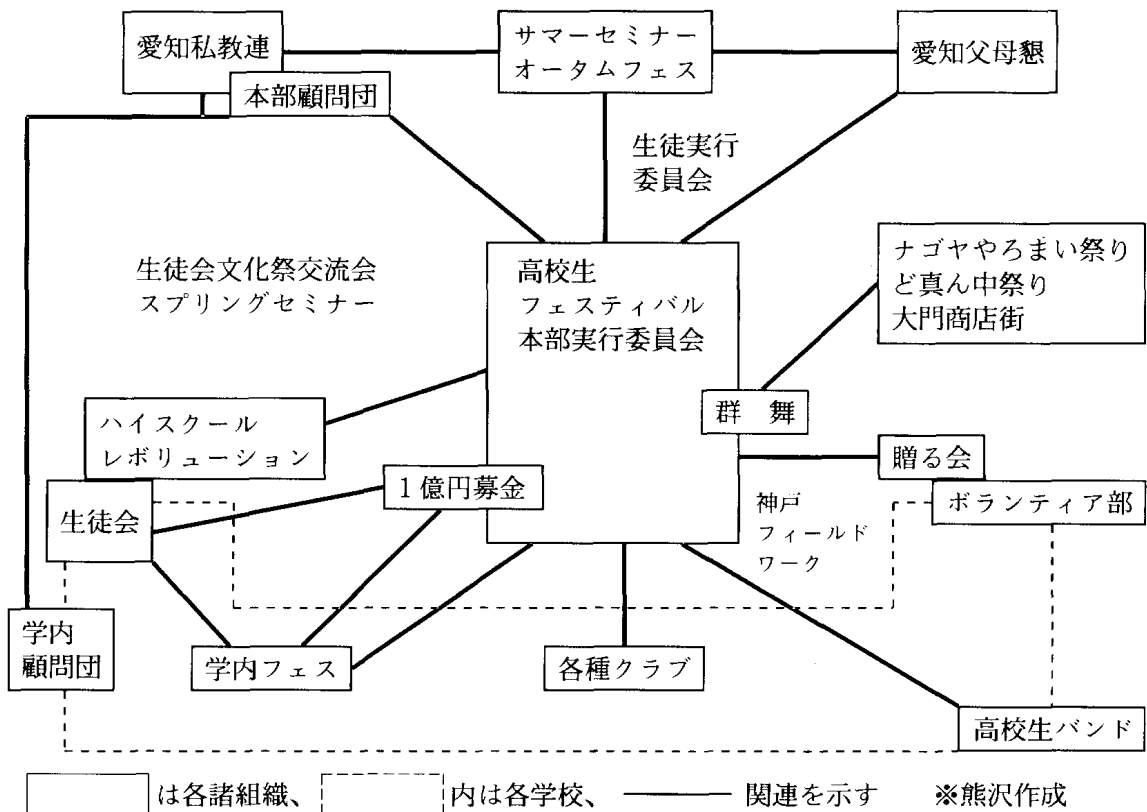


第一に、日常的に実行委員の生徒に寄り添いながらも、問題を指摘し強く迫る指導的側面。第二に、現実問題として高校生では不可能こと、すなわち大人でなければ出来ないことをおこなう支援的側面。第三に、参加確認や要請などの教師の側からも、ともにフェスティバルを作りあげていくという協同的側面がある。

### 5. 高校生フェスの組織が示唆するもの

高校生フェスティバルの活動と組織について、その全体像を浮かび上がらせるため、出来る限り多くの高校生フェス実行委員会とそれに関わる多様な活動を、いささか「網羅的」に取り上げてきた。これまで取り上げた高校生フェスティバルとその関連組織図を図示すると次の【図2】のようになる。

【図2】高校生フェスティバル関連組織図



ただ、ここまで見てきた中で高校生フェスにおける学校や社会との触発と環流を生み出す要素の一つとして、このフェスの組織的な特徴があることが明らかにされたといえる。

第一に、高校生フェス、とりわけ本部実行委員会が多種多様な高校生の自主的活動組織・集団の関係を紡ぎ出す「センター」としての性格を持っていることがある。つまり、高校生フェスは春と秋の「フェスティバル」開催という目的追求組織ではあるが、この「フェスティバル」の企画の内容を全て「自力」で実施すること、これを本部実行委員会だけで「完結」させることは不可能である。だから、「フェスティバル」の諸企画を創造していくために、きわめて多様で多数の高校生の自主的活動組織や集団、さらには私的グループ、個人が合流することになる。それは、各校生徒会、学級、各種クラブ・部活動、高校生バンドなど、それぞれの目的を持ち、活動を展開しているものであり、それらが「祭り」としての「フェスティバル」にそれぞれに固有な要求と専門的能力を発揮する形で合流し、作りあげていくことになる。フェス実行委員会は、その「呼びかけ人」として、これら多様な組織をコーディネートして「フェスティバル」を作りあげていく。さらに、それは単発的に「フェスティバル」開催時のみに完結させていない。多様な組織がそれぞれの多様な活動を展開しながらも、フェスとの関係がとぎれることなく、本番の「フェスティバル」以外の日常的な活動に、その目的に応じて合流し、また場合によっては、フェス実行委員会が合流するという形で、つながり続けている。

すなわち、高校生フェス実行委員会はそれぞれの多様な高校生組織が、「点」ではなく、まさに「線」として関係を持ちつづけ、それら多様な高校生の自主的活動組織・集団の「センター」としての機能を有しているといえることができる。

第二に、高校生フェス実行委員会が、このような「センター」として機能するために、各学校との関係をつなげる組織が位置づけられているという点である。「フェスティバル」開催のためには、各学校の多様な自主的活動を掘り起こす必要がある。もちろん、本部実行委員の生徒もそれぞれの学校に所属するわけであるから、彼らが個人的に知っているクラブなど

の組織に直接当たることもある。しかし、学内フェスがそれぞれの学校に存在し、それを組織的に掘り起こすための機能を持っている。学内フェスによって各学校とフェス本部の関係がつながり「フェスティバル」開催にむけて、各校の多様な組織が合流しやすい環境をつくりだしている。また、それは「フェスティバル」を作りあげるという側面だけではない。「学校改革」を目指す生徒会交流組織としてのハイレボによって、日常的な活動を各校生徒会と連携している。そこでは、校則改善運動などの各校の取り組みを交流し、触発する。さらには、一億円募金運動のようにフェスの呼びかけによっておこなわれる一斉募金行動に各校生徒会が合流し、その一方で各校生徒会がおこなうそれぞれの募金行動に、各校のフェス実行委員が中心的役割を担うという相互作用が働く。このように、フェス本部と各学校をつなぐ組織が意図的に形成され、日常的に関係を持ち続けていることで、フェス実行委員会がまさに「センター」として機能する。

第三に、このような高校生たちの活動を支える、大人たちの組織が存在することである。特に、教師顧問団においては、「フェスティバル」諸企画の立案、準備を生徒とともに当たりながら、本部での日常的な活動を本部顧問団が支えている。各学校内では、学内顧問の教師がフェスの生徒たちを支える。そしてこれらは、別個に活動しているのではなく、生徒実行委員の動きと並行しながら、本部と各学校への関係を愛知私教連によって日常的につくり出されている。彼らは、フェスの生徒を日常的に指導しつつも、学校的な「指導——被指導」の関係に固定されず、むしろ生徒との協同的關係をもつくり出している。

第四に、これは今後の可能性という点も多いに含んでいるが、群舞や一億円募金の活動を軸に、学校とフェスとの関係のみならず、現実の社会に生きる様々な市民との関係も日常的につくり出されはじめている。まだ、現段階では特定の層に限られてはいるが、「なごややろまい祭り」や「日本ど真ん中祭り」に参加し、そのステージを飾る。さらには地域の商店街の祭りにおいて、高校生フェスの生徒が商店街の人々に群舞を指導し、ともに踊る一方で、商店街で一億円募金運動を展開するという形で、高校生の自主的活動組織の「センター」でありながら、学校やフェスの枠さえも

越えて大人との多様な組織と活動ともつながりは始めている。

このように、高校生フェスは多様な高校生の自主的活動組織の「センター」として「フェスティバル」の開催を中心に、それらの関係をつなげ、それを可能にする、学内フェスやハイレボなどの組織や1億円募金、群舞などの活動を軸に学校内外の組織化をはかることで、高校生の学校参加・社会参加を支援するシステムが形成されているといえる。さらにそれは、高校生だけの閉じられた「自治」組織ではなく、一定の自立性を持ちながらも、教師顧問団による学校内外での指導・支援と協同的活動が組織されているのをはじめ、父母、多彩な市民による支援と協同性によって機能しているといえよう。

以上、本稿では高校生フェスティバルの活動において、その全体像の解明のために、特に組織的な側面に焦点を当てて検証してきた。では、この活動の中で、高校生が民主的主権者としてどのように行動し、その能力が形成されていくのか。高校生の民主的主権者形成において、学校とフェス、さらには現実の社会はそれぞれどのような影響を与え、関係しているのか。教師顧問団と実行委員生徒との関係性、すなわち協同性・自立性・指導性がどのような状況において生まれているのか。そして、このような活動において、教師顧問団をはじめ大人との協同性を持ちながら、高校生の自治がどう位置づいているのか。

これらの課題にこたえるため、今後も継続的に「高校生フェスティバル研究」を続けていくことを示して、「序説その①」としての本稿を終えることにする。

#### 【註】

- (1) この「学校スリム化」論の原型としては、経済同友会の「学校から『合校』へ」1995年、がある。
- (2) 筆者は地域を学校をも含み込んだものとしてとらえる。本稿ではとりわけその意味を強調する際には“地域”と表記する。また、学校とは相対的に区別された「学校の外」としての地域を強調する場合には「地域」と表記するも

のとする。

- (3) 熊沢勇紀・西内裕一「“地域”子ども組織における民主的主権者の形成——『アパッチの旗』の旗手たち（上）（下）——」『福島大学教育実践研究紀要第32号』1997年，参照。
- (4) 井上毅「高校生フェスティバルのなかでどんな力が発現したか」『教育』1992年4月号。
- (5) 小島昌夫「きんと雲にのる悟空たち」『教育』1993年5月号，p.10。
- (6) 細金恒夫「愛知私教連の運動と学校づくり」『教育』1993年5月号，参照
- (7) 堀尾輝久「ゆらぐ学校信仰と再生への模索」『講座学校』第2巻，柏書房，1996年，p.253。
- (8) 橋本英幸「『利他』の喜びを発見しはじめた生徒たち」『教育』2000年2月号，p.92。また，下村幸裕も「単に『政治的・社会的』活動に踏み出したという評価にとどまるものではありません。生徒たちは，この活動を通じて，自分を語り，社会との新たな関係を構築しています。これは社会や人間への信頼を再構築するという，すぐれて今日的な『教育活動』として発展しています」（下村「仲間を救え！躍動する高校生たち」小木・立柳・深作編『子育ち学へのアプローチ』エイデル研究所，2000年，p.168）と評価している。このことは，「教育としての自治と権利としての自治との関係」（竹内常一『学校の条件』青木書店，1994年，参照）の内実を見ていく上で重要な点を含んでいる。
- (9) 愛知私教連『流れよ，教育の大河』高文研，1990年。
- (10) 同，pp.78-80。
- (11) この間の教師と生徒との緊張関係をともなった議論は，前掲書 pp.93-95 を参照されたい。
- (12) 「一方的に授業を進め，ちょっと質問をすると，『そんなことは知らなくてもいい！』と怒る先生がいる」などの授業に関わる不満。だが，最も鋭かったのは，「生活指導」としての管理主義への不満であった。「髪は三つ編み，リボンはだめ，靴下は三つ折り……学校は私たちが個性のないロボットにしようとしているのか」「寄り道禁止の校則があって，学校帰りに頼まれた買い物をして補導される」「男女交際が禁止されていて，地下鉄の中で中学時代の同級の男の子と話してただけで，授業中，生活指導室に呼び出され，ねちねちと尋問された」「ちょっとでも気に入らないと，殴る先生がいる。暴力教師は何とかして欲しい」これらはほんの一部にすぎないが，そのような告発は，学校や教師を否定しているのではなく，もっといい学校にするために「学校はもっと生徒を信用すべきだ」との主張でもあった。『流れよ，教育の大河』pp.96-97。

- (13) 当時、「ミッテラン大統領と会見して、1200億円もの緊急教育予算を引き出した高校生を呼んで、ディスカッションしよう」という開催2ヶ月前に生徒の提案がきっかけとなり、企画長の生徒と顧問教師がパリへ向かい、交渉。フランスから二人の高校生代表と教師1名の来日により実現した。(井上毅, 前掲論文)
- (14) 下村幸裕「愛知県高校生フェスの“波風体験”～街とつながる活動で、再生へ～」第29回全国私学夏期研究集会報告, 1998年, 参照。この「解散の危機」における状況, 教師と生徒との議論, その後生徒実行委員たちが示すことになる「これからの決意」(これは, 現在も実行委員会本部に掲示されている)は, 重要な「転換点」であり, 民主的主権者形成におけるフェスの活動の内実をみる上では詳しい検討が必要であるが, 活動の概要と組織を解明する本稿の目的とは異なるので詳しくは触れない。別稿に移す。
- (15) 1999年度の活動に関しては, 下村「仲間を救え! 躍動する高校生たち」前掲書, 参照。
- (16) 鈴木庸裕「地域生活指導における地域づくりの課題」『生活指導研究』第13号, 1996年。
- (17) 浅野誠『転換期の生活指導』青木書店, 1996年, p.135。
- (18) この企画を担当した生徒は, 会場付近のカラオケボックスを回り, カラオケ機材の貸し出しを依頼し, その店長から無料での貸し出し許可をもらう。だが, その条件として「先生方の打ち上げパーティーを店でやって欲しい」との要請がカラオケ店から出される。顧問教師団内に論議が起こるが, 結果このカラオケ店で「顧問団打ち上げパーティー」を実施し, 機材の無料貸し出しを受けた, という一幕もあった。
- (19) この「語り」や教師顧問団の「問題提起」は, 本研究において非常に重要な論点を含んでいるが, 本稿では詳しく触れず, 別稿に移すことにする。
- (20) 桑村康裕「権利の主体として成長する高校生たち」『高校のひろば』10号, 1993年, p.59。
- (21) 「YOSAKOIソーラン」については, 軍司貞則『踊れ!』扶桑社, 2000年, 参照。
- (22) これとは別に「フェスティバル」の群舞企画を見た私立高蔵中学(高蔵高校と併設)の青年教師が, この群舞を学校行事である文化祭に位置づけ, その一環として「高蔵Jガールズ」として, 99年の「ど真ん中祭り」に参加していた。これはむしろ, 教師自身がフェスでの群舞に触発を受け学校で提案するという形で環流した例だが, 2000年は生徒の要求により高蔵中学・高校でチーム名「咲良」として参加した。
- (23) 小島昌夫, 前掲論文, p.11。

- (24) 井上, 前掲論文, p.34。また, 「人間ガードレール」に至るまでの父母と教師の経緯は, 寺内義和『大きな学力』旬報社, 1996年, pp.124-127。
- (25) この学校内外で生徒実行委員に寄り添い, 指導や援助をし, 彼らを評価することが, フェスと学内の触発と環流を生み出す重要な要素である。時には生徒たちの「壁」となって顧問教師が立ちふさがる場合もある。その具体的な内容の検証を要するが, ここでは扱わない。教師との関係性を検証する別稿で詳しく取り上げたい。